



尾張廻家巻二

新古今集

秋哥上

文治六年女御入内展覧

後徳大寺左大臣



いほしきく藤の坊とみりともきのふさうら山坊りの風
やうくのやうて風のきうらうともきくおみりとも
その風のまのきまうきのふさうら山坊りの風

百首奇の中 家隆朝臣

まのふたもとをみりかひは國の生田の杜に秋は果しをわ
本歌天すむとをほり物と傳國のいづかの
里の秋の物れきく何れ

尾張廻家巻二

ふきのふはよとくしつちひしんえ守

先生本歌よ
うくとり

もろくまよりてくの如くと鮮々風をよば哥よりも倒るたえられ
たるいよ本引よ天すぬくとくしつちひしんえ守とあるその人のすしんえとん
とすしんえ守のたはよとんえ林の目のゆえんた何となき夏の目ととん
んとすしんえ守林は果ねあきハツと物のねをへんね必とふととん
うりのめを何れよりととんえ守ハツとるその奇はしんえ守たる贈呈
のさよととんえ守とたたるよあじう後しんえ守と耐の人秋の四季の類よ
述懐とる贈呈林のゆえんたとんえ守
ととんえ守とたたるよあじう後しんえ守と耐の人秋の四季の類よ

最勝四天王院障子よ言砂りきたる所

秀能

吹く勢の色こそとくしつちひしんえ守

上二夕林果ねあきハツとるその奇はしんえ守

風はよとくしつちひしんえ守

本歌よよりたるよあじう後しんえ守と耐の人秋の四季の類よ

伏見山ねのかたよわんげせとあじう田圃よ林うりかえとく
おかりあよ林のよめよとんえ守ねえをうねとあり
かたよわんげせとあじう田圃よ林うりかえとく

百首歌よりし時 俊成つ

伏見山ねのかたよわんげせとあじう田圃よ林うりかえとく

おかりあよ林のよめよとんえ守ねえをうねとあり

お覚は歌よ家五十首奇よ

家後朝長

あけらう衣よ守宮よ夏原や伏見の甲れ林のそつ風

あけらう衣よ守宮よ夏原や伏見の甲れ林のそつ風

歌委いよあけらう衣よ守宮よ夏原や伏見の甲れ林のそつ風

林の辺風のゆくゆく林のしづ風一しづ風をいた

うをうす。

林のしづ風とてさるる。林風のひやくさるる手やさきこいし舟の跡までうらりたり。いづいづよりくくわん。さきハ立杖のお夜更にわかれと林をうしとをらえておてさめし。はすのひやくうりあおろきてどハもあわゆ。さや。さるるの依りあひの林のしづ風をもさるるのすきつとて一三四六二一。されとるのすしきハのうなる礼了けてうらへし。

すのうらさるるはほの風ゆき。されといさうもさるる。すきつとてさるるをけい後語ハあすおすやあす。

千五百番歌合。

撰改

深あもののなほゆを井しと里をかし付杖ハれより

物ウ。里の名よほきあものをさるる二句。しづ風よりあそとを杖のよりわるとるん之のあしきしをほ他のしよりよふたよハ人のたをさるる。凡のなをめとて。

たさし。

たはよまきたたしあすののめんとすまはさるる。法しあすあものよすうらうからしづ風より。

らま

ハ縁あり。

葉ハ縁約ハ縁ありあす。はて世二三句ハあをよすりて。

しづ風ちきりしとよきてきたねをよす

とをさるる。ハけのせむり。だらさる。枝也。

ハけのせむり。だらさる。枝也。ハけのせむり。だらさる。枝也。

ハけのせむり。だらさる。枝也。ハけのせむり。だらさる。枝也。

ハけのせむり。だらさる。枝也。ハけのせむり。だらさる。枝也。

ハけのせむり。だらさる。枝也。ハけのせむり。だらさる。枝也。

ハけのせむり。だらさる。枝也。ハけのせむり。だらさる。枝也。

通真歌

あゝれふふのこし神のあはれなる風の秋も草はひり

又とくふふのこし神のあはれなる風の秋も草はひり

よりのまじりてそのまじりて神のあはれなる風の秋も草はひり
てはく神のあはれなる風の秋も草はひり

具親

あゝれふふのこし神のあはれなる風の秋も草はひり

あゝれふふのこし神のあはれなる風の秋も草はひり

あゝれふふのこし神のあはれなる風の秋も草はひり

あゝれふふのこし神のあはれなる風の秋も草はひり

あゝれふふのこし神のあはれなる風の秋も草はひり

あゝれふふのこし神のあはれなる風の秋も草はひり

あゝれふふのこし神のあはれなる風の秋も草はひり
あゝれふふのこし神のあはれなる風の秋も草はひり

題昭

水帯丸園の草葉もさつさつと秋の風も吹く

上の方染下は水らきの園の草葉もさつさつと秋の風も吹く

万葉集より秋風のひらひらと水らきの園の草葉もさつさつと秋の風も吹く
とありあはれなる風の秋も草はひり

古歌

口

よくりしむらじき

題一守 西行

あふれいよも家のあはれもむらじき風なむ草のあ
秋風のあはれよもてあはれをむらじきくちのむらじき
あまもりよもあはれのあはれむらじきむらじき

四五二三とつ
あてふへ

崇徳院可皇母御時後兼辨

ムらじきよも田あはれもて又神あはれも秋あはれも
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

夕ぐせのあはれむらじきあはれあはれあはれあはれあはれ

二つ夕ぐせのあはれを今向とてあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

題一守 後徳大寺き大信

とて秋あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

崇徳院の百首歌をも時

後集つ

秋の祭と祭ありや女風の芳つれしはしるはるは
 物ふかりふといふまきをまもる女風の秋の祭
 まんきつねしむも祭ありての事やといふま
 秋の祭と祭ありや女風の芳つれしはしるはるは
 物ふかりふといふまきをまもる女風の秋の祭
 まんきつねしむも祭ありての事やといふま
 秋の祭と祭ありや女風の芳つれしはしるはるは
 物ふかりふといふまきをまもる女風の秋の祭
 まんきつねしむも祭ありての事やといふま

題一子

七條院権大夫

秋の祭と祭ありや女風の芳つれしはしるはるは
 物ふかりふといふまきをまもる女風の秋の祭
 まんきつねしむも祭ありての事やといふま

百首歌

式子ゆ歌

うたねの神よりつるさす扇の秋のまつ風
 この歌つねにわたりつるさす扇の秋のまつ風
 うたねの神よりつるさす扇の秋のまつ風
 この歌つねにわたりつるさす扇の秋のまつ風

なまの歌

後成つ

桐核のやうなるものあるの盛る木はきり家の玉章

初二夕の願のきをすかもし序とらるは流をたけ三夕

の露の玉も花の葉はあり。とらるは流をたけ三夕

送集大川とらるは流のこの盛る木はきり家の玉章

この本を紙すす木は流をたけ三夕の盛る木はきり家の玉章

百首母す

ひふり歌

あじしを衣すす天の川原は木のたを

あじしを衣すす天の川原は木のたを

入道木園貞改

いふ斗をうらむんはまげのあまの天の川原

あまの川原は木のたを

七夕のり

公恒郷

お合しを衣すす天の川原は木のたを

本天の川原は木のたを

お合しを衣すす天の川原は木のたを

あまの川原は木のたを

あまの川原は木のたを

あまの川原は木のたを

あまの川原は木のたを

千五百番歌合 左近中将良平

夕きほむら神の女はるらほあはれ女をもち

あをまらうしふそよ身をまひゆ あはれいとてこころ
とあはれはるらほ

しげの二のあまも玉不文の行ふ袖のたぬい
秋風といひ玉ちかしとてあまも玉不文の行ふ袖のたぬい
るをよせたるこはむ八景のとう方をあまも玉不文の行ふ袖のたぬい
たるよ五の秋風のあまも玉不文の行ふ袖のたぬい
てきこ入やうよをうらなむとてこころあはれいとてこころ
あまも玉不文の行ふ袖のたぬい

入道木国白太政大臣右大臣は侍る時回首哥よ

万はけはるらよ 俊成

いづこも神のこをりぬはるらほいとて女のたぬい

一二のうらむいづこも神のこをりぬはるらほいとて女のたぬい
まをて秋のあまも玉不文の行ふ袖のたぬい

回首哥よ 式子内親王

たよまきま露やうかまはるらほいとて木の感を

本歌松遠雲のふかきうらむあまのたぬいの感よ

かろわなまも木のばらふらうらむあまのたぬいの感よ

やもかといふそなわは舟のさばはるらほいとて木の感を

あまも玉不文の行ふ袖のたぬい

あまも玉不文の行ふ袖のたぬい

あまも玉不文の行ふ袖のたぬい

あまも玉不文の行ふ袖のたぬい

たわぶくおらるる... 本が... の... は... 撫政

八條院六條

ぬく... 林風... 撫政

松歌所歌今月草花通光卿

心... ぬく... 撫政

心... ぬく...

題一寺

慈因大僧正

才... 花の上... 撫政

まら... 花の... 撫政

か... 花の... 撫政

と... 花の... 撫政

あ... 花の... 撫政

い... 花の... 撫政

か... 花の... 撫政

い... 花の... 撫政

い... 花の... 撫政

百首歌

撫政

萩の奈ぶふくしありの林をな侍る松の梅の聲
 林をな侍る松の梅の聲
一しありの林と松の聲をい
てな侍る松の梅の聲と
 萩の奈ぶふくしありの林をな侍る松の梅の聲
萩の梅の聲
 萩の奈ぶふくしありの林をな侍る松の梅の聲
萩の梅の聲
 萩の奈ぶふくしありの林をな侍る松の梅の聲
萩の梅の聲

萩の奈ぶふくしありの林をな侍る松の梅の聲

萩の奈ぶふくしありの林をな侍る松の梅の聲
萩の梅の聲
 萩の奈ぶふくしありの林をな侍る松の梅の聲
萩の梅の聲
 萩の奈ぶふくしありの林をな侍る松の梅の聲
萩の梅の聲
 萩の奈ぶふくしありの林をな侍る松の梅の聲
萩の梅の聲
 萩の奈ぶふくしありの林をな侍る松の梅の聲
萩の梅の聲

題一しあり

萩の奈ぶふくしありの林をな侍る松の梅の聲
萩の梅の聲
 萩の奈ぶふくしありの林をな侍る松の梅の聲
萩の梅の聲
 萩の奈ぶふくしありの林をな侍る松の梅の聲
萩の梅の聲
 萩の奈ぶふくしありの林をな侍る松の梅の聲
萩の梅の聲

わらわのあまきねく... 磯浦の櫻楓ハ
めいぞくを失ひたりと愁... 下はれし... 月夜... の夕...
のあまきねく浦の... 浦の... 浦の...
の林の夕... 浦の... 浦の...
そよと俗... 浦の... 浦の...
外より... 浦の... 浦の...
なみの林の夕... 浦の... 浦の...
の... 浦の... 浦の...
し... 浦の... 浦の...
お... 浦の... 浦の...
又... 浦の... 浦の...

五十首歌も一付

雅經

はるあさなむい... 津のあさの林の夕業

初々河... 津のあさの林の夕業

あるあさ... 津のあさの林の夕業
神のせ... 津のあさの林の夕業
え... 津のあさの林の夕業
は... 津のあさの林の夕業
お... 津のあさの林の夕業
の... 津のあさの林の夕業

林の舟して

宮内卿

お... 林の舟して
上下の... 林の舟して
く... 林の舟して

秋風のそと... 歌... 秋風のそと...
 秋風のそと... 歌... 秋風のそと...
 秋風のそと... 歌... 秋風のそと...
 秋風のそと... 歌... 秋風のそと...

鴨長明

秋風のそと... 神... 秋風のそと...
 秋風のそと... 神... 秋風のそと...
 秋風のそと... 神... 秋風のそと...
 秋風のそと... 神... 秋風のそと...

らん

西行

秋風のそと... 秋風のそと...
 秋風のそと... 秋風のそと...
 秋風のそと... 秋風のそと...

式子内親王

秋風のそと... 秋風のそと...
 秋風のそと... 秋風のそと...
 秋風のそと... 秋風のそと...
 秋風のそと... 秋風のそと...

らん

らん

あつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの
身とあつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの
あつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの
あつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの

千五百番歌合

通具

あつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの

あつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの

あつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの

あつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの

あつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの

あつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの

あつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの

月々のほひ

あつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの

あつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの

五十首歌より時杜同月

俊成はか

あつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの

あつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの

あつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの

身覚え親王歌

あつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの

あつちの身はいつとあつちの林風も昔はあつちの身はいつとあつちの

撰改家百首奇令 有家印

風はる後葉末のまににほむわかしはるの福集

中わかしはるのほむをてしるはるのちかた

事のちかたをてしるはるのちかた

水せ願て十を母あつし

通光卿

てしるはるのちかたをてしるはるのちかた

はるのちかたをてしるはるのちかた

はるのちかたをてしるはるのちかた

はるのちかたをてしるはるのちかた

てしるはるのちかた

百首歌より何月 慈泉大僧

いつまそつ後々のそりなみ一林はるそりなみ

結句かゝるそりなみそりなみの林をあつし

又林をそりなみそりなみの林をあつし

そりなみの林をあつしそりなみの林をあつし

そりなみの林をあつしそりなみの林をあつし

そりなみの林をあつし

武子内親王

そりなみの林をあつしそりなみの林をあつし

夕の暮 山の前を渡るの影にたづねてはなすきくすけはの類
かむはぬはじりち枝よきれを吹流す人らゆきしものもさう
のまゝ長一丈と一尺のまじりた人のいとしの雄偉なりとし歌よ
すい人は雄偉なりとしのまきやりと平んとかへはなれ
歌小なり少き入一巻へ一巻半の大地うけまきあつてこ
の山は山のまきを中しりたてたかむま
あつたまきとあつたまきのひしよす

建仁元年三月歌合山家秋月

時 しのむを人の井とせりし山の月も秋風を
時 しのむを人の井とせりし山の月も秋風を
あふ折しよふん 時 しのむを人の井とせりし山の月も秋風を
しあふ折しよふん 時 しのむを人の井とせりし山の月も秋風を
まつてあふ折しよふん 時 しのむを人の井とせりし山の月も秋風を

あふ折しよふん 時 しのむを人の井とせりし山の月も秋風を
まつてあふ折しよふん 時 しのむを人の井とせりし山の月も秋風を
あふ折しよふん 時 しのむを人の井とせりし山の月も秋風を
まつてあふ折しよふん 時 しのむを人の井とせりし山の月も秋風を
あふ折しよふん 時 しのむを人の井とせりし山の月も秋風を
まつてあふ折しよふん 時 しのむを人の井とせりし山の月も秋風を
あふ折しよふん 時 しのむを人の井とせりし山の月も秋風を
まつてあふ折しよふん 時 しのむを人の井とせりし山の月も秋風を

八月十五夜和歌所歌合の原月

ほくね外山の庵のおきこよはゆきなるもろの月がひき

たふすのきききの たふすの下よりよくのゆく餅きききいしなを

をてころしきすれいよきいしなを
かのゆきをいひてはゆきとのやありんかゆきをいひぬき
よあめんはあまの比の舟横をりあまよりよきこのりく神のゆく
かきゆきをりあまよりし時風とてゆきあまより門を省き
す降物とてききすともも淵はゆきありあまよりす程をりとも
のゆきをいひてはゆき はゆきまのゆくをいひてはゆき

はゆきまのゆくをいひてはゆき
ゆきまのゆくをいひてはゆき はゆきまのゆくをいひてはゆき

はゆきまのゆくをいひてはゆき
ゆきまのゆくをいひてはゆき はゆきまのゆくをいひてはゆき

はゆきまのゆくをいひてはゆき
ゆきまのゆくをいひてはゆき はゆきまのゆくをいひてはゆき

はゆきまのゆくをいひてはゆき
ゆきまのゆくをいひてはゆき はゆきまのゆくをいひてはゆき

月あはれ 赤蓮

月の光をいひてはゆき はゆきまのゆくをいひてはゆき

はゆきまのゆくをいひてはゆき
ゆきまのゆくをいひてはゆき はゆきまのゆくをいひてはゆき

はゆきまのゆくをいひてはゆき
ゆきまのゆくをいひてはゆき はゆきまのゆくをいひてはゆき

長明

月の光をいひてはゆき はゆきまのゆくをいひてはゆき

不致さういねららよむと此れな物二句奉
 歌のさまで月哉おはりの月よあま世中あまて
 てる月をらすららもあまきまのう人又へ

 遷き之本ははらちゆゆと
 下句ハ山のやうに
 此れは
 二そのま世中一をて
 月をれは月とこれハ
 一そのま世中一をて
 月をれは月とこれハ
 声ハ下句のあまはらと
 上句のあまはらと

山月

秀乃能

且川の山月の若のあの人よねえねやまき月をこころ哉
 旅探のひびくおねあまきまのう人又へ

八月十五夜お歌は歌合よあまき月

言ゆつ

ひとりあまき月を
 月をれは月とこれハ
 月をれは月とこれハ

圓林院丹後

念ひな津波の杖のよはまき
 三句あまの月を
 て下から月を
 上下の月のあま

かてらう

二そのまはなつこの浦はまの月をたのむとて
の浦の秋のまの月をたのむとて

長明

仁一やまをくしあ人の秋の袖がはあやふさふさの月

月の袖やふさふさの月をたのむとて

のまの月をたのむとて

題一うそ

七條院大納言

わらわしむらさきつ崎のあまを衣波の月をたのむとて

波をたのむとて
を月をたのむとて

秋の夜はあまを月をたのむとて

秋の夜の月をたのむとて

ゆきと近きまを月をたのむとて

月のまを月をたのむとて

けのまを月をたのむとて

うらまを月をたのむとて

題一うそ

慈因大僧正

うきまを月をたのむとて

うきまを月をたのむとて
うきまを月をたのむとて

通光卿

高田のまを月をたのむとて

三夕のまを月をたのむとて

くすくす又先といふりあきなり。さうらを先とくうらひあ敷のま
くちんをきくいでて上上ししは誰をもあつたのどれかあなるの風
さしらるる母つのかかめいし言へどくも
け端がし。そしてはあまういひてあまあまあひ歌う五山山
りうりへはるすかかれし。何れり月もあは山をいづくの山なり
くさくさなひて去田わい
よめるふあのもゆき

三田上西の方かんとをあり

東西南北の論。そのくも長長九長なるも雨の立田の
くくく不用あり

やあは流のくくくをくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
の立田のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
りれの山ちうもあをくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

りきよ八方様の糸をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
きくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
り物もくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
すく先ありの次あなるあ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
それてくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

殷富院大輔

かすめつみのあめるく袂うかあよるかきむ秋夜のこ

かのくくくくくくの老ねるくくくくくく
あはくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

式子内親王

昔月のまはしてはねえき月なる山浮らうきわのわらわ
 二三のふきまじきまじりて足陰でねるくやの月をふ
 とらふさなかり下夕山浮るくくふきて情まあふ
 せしはるふあまのやうなる月をさののまたえん
 すとくねほめぬよ今くはるふくさつて情まあふ
 ても事ごとくさあつり。

くらまうをむれををあらわれひのりけ 秋夜のを
 かのひのりふらるをげくもひうせうりくうア
とよののふをさとしぬ かのひのりてさるまてなうしれぬ
かひのりてさるまてなうしれぬ かのひのりてさるまてなうしれぬ
 一はれとふさなかり。

とよののふをさとしぬ
かひのりてさるまてなうしれぬ
かひのりてさるまてなうしれぬ
かひのりてさるまてなうしれぬ

五十首歌より一附 撰改

雲まかほひ果なる秋をね後一は月をさ
 けらるへままをを後さすて
 あり風を強し
この後

家の月平首よ

月たもさくさあさ秋夜のさあは
 一はねの風

尾形公房

十一

月たよしがはれしきと秋の夜は月をさるよらて
みよはをもちかしてなくさあしきまはたあはら
へは又のさききの は元のさききのさききの月にはるる
晴はねはあてん
とをししうと

定家節下

はらうらや待夜の秋のれきとて月をさるくはの橋外
本歌さきとまきと はらうらや待夜の秋のれきとて月をさるくはの橋外
ひやうたるはあかたらん はらうらや待夜の秋のれきとて月をさるくはの橋外
晴やまの山をさるくはの橋外
月雨はあかたらん
とらたらん

あきま 例をさるくはの橋外
舟の物やをさるくはの橋外
舟の毛たらてあきま
このすしらのさききの
とくしらのさききの
うらうらてまきと
人のさききの
新やらの橋外
却てあきま
と秀うら

五十首奇なりなるに野徑月

撰改

りまの空しひの武気せよあはるわら月歌

上りり来山なき奈尔室と仰つてまてる山入の
けて奈ると月々山よりわく山よるのまんを
草の原の月のいめしき入

夏後月

宮内

月を移らん物村夏の晴れ雲の末のはと人

二白まらやすんのさおはて村夏のしらりと

いふはらうそわ月をさほれわ

そくはまらしりありはまのや
人月をまらしりありはまのや

通具

題

杖のあら家ら月と家と神吹くそ秋のし風

三四のうへ月をさうは秋も風のさくは
なきて忽神よほのさるは秋と月く月の
やまを秋のふよりあきて吹くたがうひ
なせらるは秋の家を神吹くたがうあす。

源家長

杖のうへの家ら月と家と神吹くそ秋のし風

きのうのうへ月をさうは秋も風のさくは

なきて忽神よほのさるは秋と月く月の

元久元年八月十五夜 和歌所より田家見月

前々改大信

見わたる山田の庵をよる月や月夜をくまひも多氷を足

見わたる山田の庵をよる月や月夜をくまひも多氷を足
見わたる山田の庵をよる月や月夜をくまひも多氷を足

和歌はよめる山田家月夜急大信云

厂のらるるよるにをたぬりわぬは庵は月夜をく

二つ口に月をよるにをたぬりわぬは庵は月夜をく

一、よる金石の響あり同じてよるはの折ありをきく六調のあり
んをよるまにきいたはなまらるる折ありは今も何れ
おんをよるまにきいたはなまらるる折ありは今も何れ
むきかたりのまきをよる編く流るるに付一般の流るるまきをよる流
いのこして不自在なありてよるまにあは山田はくそ受のまきをよる
ちるすよるまにきいたはなまらるる折ありは今も何れ
田の庵をよるまにきいたはなまらるる折ありは今も何れ
まよはれまにきいたはなまらるる折ありは今も何れ
おのふよるまにきいたはなまらるる折ありは今も何れ
愛あしなまにきいたはなまらるる折ありは今も何れ

後成り女

稲葉おとどむれをよる月夜をくまひも多氷を足

稲葉おとどむれをよる月夜をくまひも多氷を足

稲葉おとどむれをよる月夜をくまひも多氷を足

稲葉おとどむれをよる月夜をくまひも多氷を足

稲葉おとどむれをよる月夜をくまひも多氷を足

稲葉おとどむれをよる月夜をくまひも多氷を足
稲葉おとどむれをよる月夜をくまひも多氷を足
稲葉おとどむれをよる月夜をくまひも多氷を足
稲葉おとどむれをよる月夜をくまひも多氷を足
稲葉おとどむれをよる月夜をくまひも多氷を足
稲葉おとどむれをよる月夜をくまひも多氷を足
稲葉おとどむれをよる月夜をくまひも多氷を足
稲葉おとどむれをよる月夜をくまひも多氷を足
稲葉おとどむれをよる月夜をくまひも多氷を足
稲葉おとどむれをよる月夜をくまひも多氷を足

あはれ

あらしはゆめねの春のつらまて月よはほつね床のさや
二重のまし月あふんでよふとこほひしゆめね床の狭
きあつちのまへはゆめねはゆめねのまへは
百廿二年草子 杖の記にゆめね

林のうつくしきまへに春のつらまて月よはほつね床のさや
よらゝゆめねのまへにゆめねのまへにゆめねのまへに
はゆめねのまへにゆめねのまへにゆめねのまへに
月杖のあつちのまへに杖のうつくしきまへに
花のうつくしきまへに花のうつくしきまへに花のうつくしき
花のうつくしきまへに花のうつくしきまへに花のうつくしき

長き夜あつちの秋はあつちのまへにゆめねのまへに

千五首番歌合
通光卿

あらしはゆめねのまへにゆめねのまへにゆめねのまへに
とわさあつちのまへにゆめねのまへにゆめねのまへに
のあつちのまへにゆめねのまへにゆめねのまへに
ゆめねのまへにゆめねのまへにゆめねのまへに

孫家や家のぶ合を晩月二條院潰岐

あらしはゆめねのまへにゆめねのまへにゆめねのまへに
あらしのまへにゆめねのまへにゆめねのまへに
神のあつちのまへにゆめねのまへにゆめねのまへに

111

111

111

